インド哲学仏教学研究 23, 2015. 3

曹洞宗における切紙伝授の起源について
—五位説における「銭」の比喩を中心として—

Licha, Stephan

はじめに

過去 30 年の間に，中世曹洞禅宗の秘伝の一部である切紙史料の研究は，石川力山氏等によって大きな一歩が踏み出された．しかし，その様な業績の恩恵を蒙りつつも，切紙史料の起源という問題に関して，未だ不明な点が数多く残っていることは否めない．

切紙は極めて多様であり，その創作は１５世紀頃から１８世紀にかけて隆盛を極めたことから，日本禅宗の展開のみならず，広く日本仏教の世界とその歴史的変化を反映する史料である．また，切紙史料の発達は多岐に渉り，その原初を辿ることは容易な問題ではないのである．言うまでもなく「切紙」は「切った紙」のことであり，その意義を考慮すれば，神祇信仰での「紙垂」と近い関係が見出され，「丹寸手（にきて）」として『古事記』の神話までに遡ると見做すこともできる[1]．さらに厳密な意味での「切紙」の伝授は，日本密教における面授口伝に基づき，特に中古天台宗で成形され[2]，その影響の下にあった他の宗派でも用いられ[3]，最終的に中世文化の全体に浸透していった．しかしながら，そのような切紙伝授の一般化にも拘らず，曹洞宗における具体的な発達過程となると，いまだ不明な点が多々あることも事実である．

以下で再考の対象となるものは，石川力山氏が，切紙の形成を中世曹洞宗における公案禅と洞門抄物という文脈の中で論じたことにある．石川氏の学説は，確かに正確な分析に基づくものであるが，しかし，その「公案禅」と「洞門抄物」という枠組みが，切紙資料の発展を理解するには狭すぎる嫌いがある．本稿は，むしろ切紙資料の形成が中世曹洞宗，特に偏正五位説（後述する）と易学，或は易占とそれに付随した物質文化の文脈における「秘伝化」の一過程にほかならないことを主張するものである[4]．別の言い方をすれば，切紙の発展を明らかにするためには，「洞門抄物」という枠組みに含まれない資料を考慮に入れなければ，「公案禅」という文脈だけでは，初期切紙の内容を把握しきれないと思われるのである．

以上のような問題意識に基づき，現在に残る切紙の中で最古層に分類される『一文銭之切紙』を，問題解決の糸口になる文献として考察する．本書は五位説を分析するため，宋代の貨幣である「太平通宝」，つまり易占にも用いる「銭」を明喩的に使用した，１５世紀前半にまで遡れる史料である．その「銭」の比喩は，他の五位説に言及する中世曹洞宗の文献や，或いは易学と五位説の統一を標榜する傑堂能勝（1355–1427）と，その法灯を継ぐ南英謙宗（1387–1460）の著作にも確認される．

---

[1] 薗田，橋本 [2004: 460].

[2] 花野 [1980].

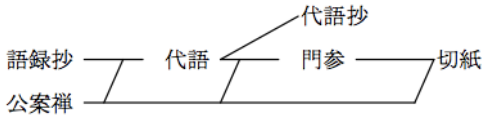
[3] 日本浄土教の口伝・切紙について，坪井 [1960].

[4] 偏正五位について，下（２）に参考.

そこで本稿は，中世曹洞宗峨山派の「五位」と「易」の解釈における「銭」の役割に焦点を絞り，切紙史料の形成を分析することを目的とする．以上の視座に基づき，まず先行する研究状況を確認する．続いて第二節においては『一文銭之切紙』を紹介し，その資料に見られる「銭」という比喩を挙げて先行研究の限界を浮き彫りにする．第三節では，傑堂と南英における「銭」とその背景を示し，それに依拠して第四節と第五節で五位説と「銭」の秘伝化の過程を分析する．最後に，切紙の形成を理解するにあたり，今までの研究で等閑視されてきた，易学と五位説との関係が不可分であることを指摘し，その重要性を明確にしたい．

1　先行研究

曹洞宗における切紙形成に関連する先行研究の中で，石川力山氏の研究は必ず取り上げられなければならない重要なものである．石川氏は切紙史料を仮名書と口語体の資料である「禅籍抄物」，特に「洞門抄物」の枠組みに位置づけ，切紙の発展をその枠組みの中で明らかにすることを試みた．その過程を石川氏は次のように図示化する[5]．



石川氏は日本禅僧による中国禅宗文献，特に語録の提唱を記録する「語録抄」があり，次に古則公案や機関に対する日本禅僧の代語を集める「代語」が登場，更に「代語」の出典や字義などを明らかにする「代語抄」が著されたという[6]．「門参」も公案やそれに対する代語を集める資料であり，室内参禅の手引書であって秘密伝授され，また，伽藍法の相承と近い関係が見出されるという[7]．「密参録」等と呼ばれ，林下の臨済宗にもあった門参に対して，「切紙」は曹洞宗の特徴の一つと言える．

石川氏は切紙資料の性格と役割について次のように解説する．

> この「切紙資料」の第一義的な機能，すなわち自派内（ここでは曹洞宗）に向け課せられた役割は，宗旨として設定された課題を正しく次の世代に伝えることにあるが，同時に内容の上からは，禅宗が文化としてある葬送儀礼をはじめとする各種の儀礼や，教義を反映した諸観念が中世社会の一部に迎えられたことを意味する．さらにこれら諸課題は，公案・看話の禅の参究の対象としても位置づけられて異常な発展を遂げることにもなる [⋯][8]．

石川氏の学説を纏めると，切紙資料の発展過程は「洞門抄物」の枠組みに起こることであり，更に，公案解釈に基づき，徐々にその具体的な手段である代語の対象範囲を叢林行

---

[5] 石川 [2001: 217].

[6]「代語」は本来の公案問答の場合，師家が学人に代わって下し，又は古則に顕われる古人に代わって下す語であるが，洞門抄物の場合，広い意味で古則公案，又はその句に対する短い解釈語である．安藤 [2000: 112–138] 参考．

[7] 伽藍法とは，現代禅宗における師から弟子への「人法」嗣法に対して，寺院に住持すると，その寺院の開山の法系を相続することである．

[8] 石川 [2001: 216f].

事・葬送・追善供養等へと広め，それらの理論を図示等によって象徴的に表現し，秘密伝授として中世門派制度の中で整理したと言える．なお，石川氏は切紙に載る代語を調査し，全く同じ代語を門参資料の中にも発見し，切紙は門参から独立して発展しつつ，同時に門参と併用されたものである，と結論付けたのである[9]．

ここでの疑問は，以上のような石川氏のモデルが，切紙の形成における複雑な要因と過程とを説明できるのかどうかということにある．その点に関して，筆者が抱く疑問点を説明するため，次に『一文銭之切紙』と，そのテキストに見られる「銭」を用いた比喩について紹介したい．

2　本稿の視座　―『一文銭之切紙』について ―

石川県永光寺に所蔵される『一文銭之切紙』は，曹洞宗峨山派である竺山得仙（1344–1413）が惟忠守勤（？ –1447）に授けたものである．それを 1414 年に守勤が書写した文献であり，中世切紙として極めて古い資料である．なお，このテキストは石川氏によって翻刻されたが，参考のために五位説と関係がある本文の一部を再び掲載する．

太平銭口伝

□陰也，世界未興也，仏未出世ノ時也，仏出世之祖師西来シテ説法利生シ玉ウ．本意ハ，不出 世ノ時ニ顕ル，所以道，在体時体中得用，又道，借功明位，用在体処，又曰，正位雖正却偏，●正中偏，△□▽陽也，世界建立也，○マワリハ天也，更無方所也，□ハ 地也，有四方有四角也，仏出 世ノ 時也，仏祖不出 世ノ時ノ 本意出世シテ説法利生シ玉ウ時ニ顕ル，所以道ウ，在ルレ用ウニ 時用 中ニ得ルレ体ヲ．又タ道ウ，借レ 位 明レ 功ヲ，体イ有ル用ニ処ロナリ．又タ 云，偏位雖偏却円，●偏中正，● 雖レ 正劫テ 偏ン雖レ偏劫テ 円，イヅレモ通ル也，仏祖出世ト不出世ト本意不相異也，イツクニテ通ルゾイフニ，ミヽニテ通也．所以道，無中有路出塵埃，●正中来，自ラ通ジ来ルトイヱドモ，正ハ正ノ位ニテ不転，偏ハ偏位ニテ不動．所以道，偏正不曾離本位，△□▽天下太 平ノ 時，風モ無浪モ無，法不法ノ一機モ無，是非ノ相ニ不渡，分別ノ理無キ時，自ラ正位ニ 的当スル也．●兼中至以前ノ四位ハ黒白偏正也．□此ノ時以 前ノ，四位ヲ超越シテ而モ四位ヲ収ル也．●兼中到[10]．

『一文銭之切紙』は禅宗の偏正五位説に基づく資料であるので，先ずその要領に触れたい．「偏正五位」というのは曹洞宗の開祖と仰ぐ洞山良价（807–869）とその弟子である曹山本寂（840–911）の教学とされ，宋時代の曹洞宗の代表的な教示の一つであると言われる．その術語と順序は大きく異なるが，曹山によって体系化されたと考えられている偏正五位は，「正中偏」・「偏中正」・「正中来」・「偏中至」・「兼中到」という五つによって構成され，諸法の実態，つまり「正」と呼ばれる空界と「偏」と呼ばれる色界の関係を五つの立場から分析するための解釈学である[11]．

---

[9] 石川 [2001: 217–221].

[10] 石川 [2001: 383f].

[11]『撫州曹山元證禪師語録』（T 47: 527a） 参考.

なお，『一文銭之切紙』に見られる五位説は洞山と曹山の五位説ではなく，むしろ臨済宗の石霜楚円（986–1039）が提示した，第四位を「兼中至」とする五位説に従っている[12]．しかしながら，各々の位の意味付けという視点から見ると，『一文銭之切紙』の五位説は単なる石霜楚円の教説を借用すると言うよりも，むしろ曹洞宗の宏智正覚（1091–1157）による言説，又は日本曹洞宗における五位の解釈を利用したと推定される．一例を挙げれば，『一文銭之切紙』を授けた竺山得仙の語録には，五位説に関して，『一文銭之切紙』に見られる五位の代語である「借レ功 明レ位」と「借レ位 明レ功」という文句が確認されるのである[13]．

切紙資料の一例である『一文銭之切紙』に語録資料の言葉も見られ，公案参禅と関係がある表現がしばしば掲載されているのは，石川氏が述べる切紙形成は公案禅と洞門抄物に求められるとする学説と親和的であることは，言うまでもない．しかし，ここで問題となるのは，『一文銭之切紙』の特徴と言える「銭」という比喩にある．

『一文銭之切紙』における五位説と「太平通宝」の比喩との関係については，銭の陰を象徴する無字の裏面が正中偏と兼中到を示し，陽を象徴する有字の表面が偏中正と兼中至を示す，ということが明示されている．けれども，『一文銭之切紙』に引用された代語等は，その五位説と貨幣の関連性が不明であり，筆者が知る限りにおいて，その様な関係性を他の語録資料などで確かめることができない[14]．このことは，『一文銭之切紙』に使用された「銭」という比喩は，石川氏の述べる，切紙相承が「公案禅」と「洞門抄物」に基づいたものとする定説の上では理解できないことを意味する．

重要なことは，五位説における「銭」の譬が傑堂・南英の著作に認められることによって，中世曹洞宗での易学と五位説とを記述する資料群に，『一文銭之切紙』との密接な関係性を指摘できることである．その点に関して，広瀬良文氏は「一文切紙より以前に，五位説解釈において銭が易占との関係上，用いられていたことを確認しておく．それが，いつしか変容し一文切紙のようなものを生み出したと考えられる」と説明する[15]．本稿では，その「変容」を「秘伝化」としてより明瞭にできるものと考えるのである．そこで，公案禅と洞門抄物という枠組みにとらわれることなく，今迄あまり切紙研究者の注目を集めなかった，傑堂と南栄の思想における「銭」の比喩とその秘伝化という問題を検討していく．

3　傑堂と南栄における「銭」の譬

易学は，十五世紀の日本曹洞宗における五位に関する考察へ極めて強い影響を与え，それは中世曹洞宗の一特徴となった[16]．もちろん，五位説は形成された時から易学と近い関係にあった．洞山の著書とされる『宝鏡三昧』に記載される「重離六爻，偏正回互，畳而爲三，変尽成五．（重離の六爻には，偏正の回互があり，畳んで三となり，変じ尽くして

[12] 日本曹洞宗における石霜楚円五位説について佐橋 [1953: 144] 参考．

[13] 『竺山得仙語録』（ZSSZS，語録 1: 26）．他に，『宏智禅師広録』（T48: 66c）と『通幻霊禅師漫録』（T 82: 482c）からの引用がある．

[14] 洞門抄物である『人天眼目抄』は「太平通宝」の銭と五位の関係に触れるが，1473 年に完全されたので，『一文銭之切紙』と関係がない．中田・外山 [1975: 359]．

[15] 広瀬 [2012: 76]．

[16] 石附 [1978]．

五となる」という四句は，その起源の一つであり[17]，更に曹山の『五位旨訣』には，各々の五位が『易』の五卦と相当させられることがある[18]．また，五位説が日本へ伝えられた際に，易学の影響は，特に曹洞宗における五位研究に浸透し，それによって五位説と易学が一統されてきた[19]．

中世曹洞宗における易学に基づいた五位説は，易の占術とそれに付随する道具をも採り上げ，それらの教学的な意味付けを中心とする．中世曹洞宗の五位説・易説を体系化した，傑堂と南英の『顕訣耕雲註種月擽摭藁』には，易占に使用する貨幣を，五位説・易学の理論を明らかにする比喩として用いられていることが確認される．貨幣による比喩は「重離」という卦を解釈するための手段であるが故に，先ず五位説における「重離」について触れたい．

中国禅宗の慧洪覚範（1071–1128）の『智證伝』には『五位旨訣』に設置した正中来＝太過＝䷿，偏中至＝中孚＝䷼，正中偏＝巽＝䷸，偏中正＝兌＝，兼中到＝重離＝䷝という対応に従って『宝鏡三昧』の四句を明らかにする[20]．つまり，重離を基準とし，その中の二爻・三爻・四爻によって巽卦を導き（䷝ →䷸），同様に三爻・四爻・五爻によって兌卦を導くこと (䷝ →) を「畳而為三」とする．そして，巽卦に兌卦を重ねて大過を形成し (䷸ + →䷿)，逆に兌卦に巽卦を重ねて中孚を形成する (+䷸ →䷼) ことを「変尽成五」とする[21]．すなわち，重離は他の四卦を生み出す母体であり，その注釈は五位説上での重要問題であると位置づけることが可能となる．

なお，『顕訣耕雲註種月擽摭藁』では，貨幣による比喩は，その重離の解釈の文脈の中で表明される．

> [傑堂能勝] 又云，拠二 陰 陽一 則陰爻背●黒也．陽爻面○白也．拠二 擲 銭一 則陰面○白也．陽背●黒也．点二 検擲 銭一，非二 陰 為レ 面陽 為一レ 背．背無文，象二 於陽之一単而中 連一．面有字，象二 於陰之二折而中 断一．陰陽奇也．洞上宗旨 不レ 然．以所謂正変 為レ 一，偏変 為レ 二之意，⊙ 葦ウラノ 無字● 為二 陽之一一．⊕ 有字 為二 陰之 二一．故次曰．正●也．偏○也．正者⊙ 也．背也．偏者⊕ 也．向也．
>
> 月 [南英謙宗] 云，如二 前師 言一，尋常陰，背黒也．陽，面白也．宗旨⊙ 背 為二 陽之 一一．⊕ 面 為二 陰之 二一 者，凡言則䷼ 初三・四・上偏也．二・五，正也．言二 正中・君一．但六五中爻也．此中爻，其背，陽之一也．其面，陽之二也．背與レ 面全正中作業也．然則 喚下作二 六 五一，君臣合 道上．作麼生是合道底理．云，臣 称レ 君 不二 敢斥 言一 是也．[…]
>
> 正●也．偏○也．正者⊙ 也．背也．偏者⊕ 也．向也．
>
> 師 [傑堂能勝] 云，陽之一正也．●也．⊙ 也．背也．陰之二偏也．○也．⊕ 也．向也．天玄地黄，不レ 見．丹霞五位予云，夫黒白未分 難レ為二 彼 此一．玄黄之

[17] T 47: 515a．その点の歴史的な問題について，Schlütter [2008: 158] 参考．

[18] T 47: 544b–c.

[19] 松田 [1995: 207].

[20] 慧洪覚範の『宝鏡三昧』の解釈について，小早川 [2011] 参考．

[21] X 64: 194a–b.

後，方 位二 自 他一．於レ 是 借レ 黒 権レ 正，仮レ 白 示レ 偏．[…] 又 有二 省灯首 坐之五 位一．恐 不レ達二 仏祖意 句一[22]．

[傑堂能勝] はまた言う，「陰陽によれば，そこで陰爻は背・●・黒であり，陽爻は面・○・白である．擲銭 [法] によれば，陰は面・○・白であり，陽は背・●・黒である．擲銭 [法] を点検すれば，陰が面となり，陽を背とすることではない．背に文が無いのは陽の一単，中連を象り，面に字が有るのは陰の二折，中断を象る．陰は耦であり，陽は奇である．[曹] 洞上の宗旨はそうではない．所謂，正が変じて一となり，偏が変じて二となるという意によって ⊙ 字の無いのを●，陽の一となし，⊕ 字の有るのを陰の二とする．だから『正は●であり，偏は○である．正者⊙ であり，背である．偏は⊕ であり，向である』と言うのである．」と．月 [南英謙宗] は言う．「前師の言のように，通常は，陰は背・黒であり，陽は面・白である．宗旨では⊙ ・背は陽の一となり，⊕ ・面は陰の二となるということは，およそ言えば，䷀ の初・三・四・上が偏であり，二・五は正である．正中・君というのは，但だ六五の中爻のみである．この中爻はその背に陽の一である．その面は陰の二である．背と面とはすべて正中の作業である．そうであるから，六五をなって君臣合道と喚ぶ．この合道の理とは何であろうか．言うことには，『臣は君を称して敢えて斥言せず』と．これである．[…]」と．

正は●であり，偏は○である．正とは⊙ であり，背である．偏とは⊕ であり，向である．

師 [傑堂能勝] は言う．「陽の一は正であり，●であり，⊙ であり，背である．陰の二は偏であり，○であり，⊕ であり，向である．天は玄であり地は黄であり，現れない．丹霞の五位の予に次のように言う，『そもそも黒白の未だ分かれざるは彼と此となしがたい．玄黄の後に，はじめて自他を位する．ここにおいて，黒に借りて正を権(はか)り，白に仮りて偏を示す』と．[…] 又，省灯首坐の五位があり，恐らくは仏祖の意句に達しない．」と．

つまり，能勝と謙宗は，貨幣を用いた比喩を重離の解釈の糸口とするのである．そこで，つぎに両師の注視する問題の所在を示し，さらに貨幣を用いた比喩の具体的意義を明らかにしたいと思うが，まずはその理解の前提になる易の解釈から検討する．

易の六十四卦の姿を分析するにあたり，「中」と「正」という概念がある．「中」とは，卦の二・五爻ということであり，「正」とは陽位（一・三・五）に陽爻，陰位（二・四・六）に陰爻があるということである[23]．つまり，第二爻に陰爻があり，第五爻に陽爻があると，その二爻を「中正」と呼ぶのである[24]．ここで問題になるのは，（重）離の「彖辞」(『易経』の各卦に対する説明）が「重レ 明以 麗二 乎 正一，乃 化二 成天 下一．（明を重ねて正に付けば，乃ち天下が化成される）」と示し[25]，その言葉が伝統的に第二爻，第五爻ともに「中正」であると解釈されてきたということである．重離の第二爻が中正ではあるものの，第

[22]『顕訣耕雲註種月擽摭藁』（SSZS, 注解 5: 53b–54a）．
[23] 卦の下から上へ数える．
[24] 高田・後藤 [1969: 35].
[25] 高田・後藤 [1969: 261].

五爻は「中」でありながら，決して「中正」ではないということである．

ここで『顕訣耕雲註種月擽摭藁』における重離に関する問題の解決と，そこで説示される貨幣による比喩を明らかにしたい[26]．先ず，能勝は易学における陰陽の象徴を挙げ，陰が陰線・銭の背・黒（●）とされ，陽が陽線・銭の面・白（○）とされることを示す．しかしながら，擲銭法の場合，その対応は逆になる．すなわち，貨幣の文字がある面が陰線に類似することから，陰は面（○）となり，文字の無い背面は陽線に似ていることから，陽は背（●）となる．しかし，その反転は姿によるものでしかなく，元々の対応関係が変わることはない．それに対して，能勝は，曹洞宗の宗旨では「正は変じて一となり，偏は変じて二となる」という道理があることを示した．つまり「正」は元来，陰・陰線であるが，変化して陽・陽線となり，文字が無い線の背に象徴され，●となる．反対に「偏」は元々，陽・陽線であるが，同様に変化して陰・陰線となり，文字がある線の面に象徴され，○となる．そのような論理により，能勝は「正は●であり，偏は○である．正とは⊙ であり，背である．偏とは⊕ であり，向である．」という教説を唱えたのである．

なお，能勝の解釈は過度に複雑であると言えるが，謙宗の説明をみると，その目的が理解される．上に紹介した重離の問題点，すなわち第五爻の陰爻を「中正」とすることに立ち戻って考えると，謙宗は，重離の構造を「初・三・四・上が偏であり，二・五は正である」と明らかにした後に，「六五」の第五爻が「中正」であることについて「この中爻はその背に陽の一があり，その面に陰の二があるとする．背と面はすべて正中の作業であるので，六五を君臣合道と喚ぶ．」と解釈したのである．言い換えれば，一般的に重離卦の第五爻は陰で，「中正」と呼ばれないが，能勝・謙宗の五位説には，その陰爻は表面のみであり，その裏に陽爻があるから「中正」である，と言い得ることになる．

要を言えば，「銭」については，能勝と謙宗は重離の第五爻の「中正」であるという問題を受け，擲銭法に見られる陰・陽を現す象徴の逆転を解釈の糸口とし，貨幣を「正は変じて一となり，偏は変じて二となる」の比喩とした上で，第五爻を「銭」から導いた「表」・「裏」，「面」・「背」という交換可能な概念によって明らかにし，その「中正」を証明したのである．

この能勝と謙宗の五位説における「銭」には『一文銭之切紙』と比較すると，幾つかの相違点が認められる．中でも最も顕著な相違は，能勝と謙宗の言説において，重離の「正中作業」を示すのが「銭」であるのに対して，『一文銭之切紙』では貨幣の表面と裏面が，直接的に五位を示すとされていることである．しかし，『一文銭之切紙』においても，五位と銭との関係は明らかに陰陽と銭とする解釈に基づいている．つまり，『一文銭之切紙』と能勝と謙宗の五位説における「銭」は，その具体的な内容が一部異なるものの，その背景は同じであると考えられる．更に，『一文銭之切紙』を授けた竺山得仙は，能勝，謙宗と同じ峨山派に属しながらも派内部の別の門流であり[27]，峨山派の諸々の門流は，同様の原型に基づきつつ，異なった教学を創作したと考えるのが理に適っている．何れにせよ，15 世紀，峨山派の諸々の門流には，五位説を「銭」という比喩に依拠させ，整理した教学

---

26 詳細は松田 [1998] 参考．

27 竺山得仙は峨山の弟子である大徹宗令（1333–1408）の法を継ぐ．能勝は峨山 - 太源宗真（?–1371）- 梅山聞本（?–1417）という法系がある．

があり，少なくともその一部分が，切紙の形式で伝授されたということは明白である．

ここで注記すべきは，切紙である『一文銭之切紙』に対して『顕訣耕雲註種月擽摭藁』は特別に秘伝と関係がないことである．しかし，能勝と謙宗の「銭」が秘伝伝授と全く関係がなかったというわけでは決してない．以下では五位説の秘密化について勘案していきたい．

4　謙宗の五位説の秘伝化について

能勝と謙宗の五位説は禅宗の諸門派の間における論争という文脈に発展していき，更に謙宗の著作に見られる「秘伝化」も論争と密接な関係がある，と言ってもよいであろう．前に掲載した『顕訣耕雲註種月擽摭藁』の引用文中に見られるように，能勝は「更に省灯の五位があり，恐らく仏祖の意句に達しない」と記述している．臨済宗の人物である省灯（生没年不詳）の五位説を謙宗は『偏正五位図説詰難』の中で細かく批判する．

ここに注目すべきは，能勝が省灯の五位説を批判しながらも，初めて批判を「秘密」という概念に縛ったのは謙宗であったということである．すなわち，『偏正五位図説詰難』には，洞山の『五位顕訣』について次のように説明する箇所がある．

> 所レ謂五位顕訣，洞下 秘レ之．故他家 不レ知レ有二此 書一．
>
> いわゆる『五位顕訣』とは，[曹] 洞宗はこれを秘密とする．ゆえに他の宗派はこの書があることを知らない[28]．

さらに，謙宗は省灯が重離の中爻，つまり重離の第二・第五爻を正とし，上・下爻，つまり重離の第一・第三・第四・第六爻を偏とすることを下の如く非難する．

> 云，偏正解説是也．蓋 称レ陽 為レ偏，称レ陰 為レ正之説，只 知二其 一一，未レ知二其 二一 也[29]．
>
> 云う，「偏正の解説はこのことである．おそらくは，『陽を称して偏とし，陰を称して正とする』という説はただその一を知るのみで，未だその二を知らないことである．」と．

謙宗によれば，省灯の五位説には誤りがあるのみならず，その誤りの起源は，省灯が曹洞宗に伝授される五位説の秘密，つまり「その二」を知らないことである，と言う．

謙宗に抱かれた「秘伝」という概念は時間と共に重みを増したものであろう．謙宗の晩年の著作である『重離畳変訣』での特徴として，二つの事柄が挙げられる．すなわち，「密伝」という概念そのものと，強い門閥意識である．

先ず，「密伝」について，謙宗は『重離畳変訣』の中で，『宝鏡三昧』の「変尽 成レ五」という句の解釈をした後に，次のように述べる．

> 蓋 雖二変 尽一，不二是 離一レ離．総 麗二乎離宮 中一．而回互円転，如二環 無一レ端而已．雖二與（惹カ） 褄一．是祇離 為レ三 成レ五之様子也．更 有二密 伝一[30]．
>
> おそらくは変じ尽くすといっても，これは離から離れない．総じて離の宮中に麗きて，回互し円転することは，環には端がないようなものであるだけだ．そのようなこ

[28] 『偏正五位図説詰難』[SSZS, 注解 5: 251a].

[29] 『偏正五位図説詰難』[SSZS, 注解 5: 255b].

[30] 『重離畳変訣』（SSZS, 注解 5: 43b）.

とであるといっても，これはただ，離が三となり五となる様子のみである．さらに密伝がある．

続いて，謙宗は慧洪覚範の重離説を挙げ，次のような批判を加える．

如レ是 未レ得二 密 伝一者之説乎[31]．

このようなことは未だ密伝を受けたことのない者の説であろうか．

すなわち，『宝鏡三昧』に基づいた重離説を理解するためには，本来「密伝」が必要であるのにも関わらず，臨済系の慧洪覚範は密伝を受けていないため，彼の重離化成説には正統性がないと言うのである．

その慧洪覚範への批判が『偏正五位図説結難』に見られる省灯への批判と相似ると言えるが，『重離畳変訣』中で窺える「密伝」に依拠する門閥意識は，臨済宗に留まらない．

雖二 恁 褸一，離互体之回互，円転回，更相渉之理，亦其妙哉．愈二 於彼明峰下秘訣及省灯首座畳様之 説一 遠矣[32]．

そうではあっても，離の互体の回互，円かな転回，更に相渉の理は，またそれは奥深いことではないか．彼の明峰下の秘訣と省灯首座の畳様の説より優っていること遙かである．

ここで謙宗は，臨済宗の門人である省灯を非難するのみならず，自らも帰属する曹洞宗の，中でも明峰派の「五位説秘訣」の正統性をも否定することがある．

15 世紀初頭には謙宗の峨山派と，明峰派との間に起きた競合は苛烈の極に達していた．結果，曹洞宗の内部に門派の分離が起こった[33]．この様な歴史的事実に鑑みれば，謙宗の五位説における「密伝」の意義と門閥意識の確立が推定されよう．謙宗の五位説強調の一つの目的は，臨済宗に対するよりも，むしろ曹洞宗内に向けられたものであったと考えられる．謙宗は，明峰派を意識した上で，自らが属するところの峨山派の宗旨を構え，その正統性を樹立しようとしたと考えられる[34]．

では『重離畳変訣』の「密伝」とは，具体的にどのようなことであろうか．最後にその問題について論じていきたい．

5　謙宗の「変」と「銭」という「密伝」

五位説上での重要問題の一つは，重離の解釈，とくに重離と他の四卦の間の関係である．先に慧洪覚範の『智證伝』に見られる，その問題の解決方法には触れたが，『重離畳変訣』には，謙宗が慧洪覚範に対する学説を提案し，下の如く説明する箇所がある．

重離六爻，偏正回互，畳而 為レ 三，変尽 成レ 五．[…]　偏正回互，畳而 為レ 三者，重二 二於 初一．重二 四於 三一．重二 上於 五一[．]　六爻便 為二 三 爻一．[…]　恁時，六五之正，変而 為レ 一．初九之偏，変而 為レ 二．謂二 之正回☲ 偏 互一．乃是巽也．[…]　次 重二 五於 上一．重二 三於 四一．重二 初於 二一．[…]　恁時，六二之

31 『重離畳変訣』（SSZS, 注解 5: 43b–44a）．

32 『重離畳変訣』（SSZS, 注解 5: 47a）．

33 Bodiford [1993: 105–107].

34 松田 [1995: 206f] 参考．

正，変而 為レ 一．上九之偏，変而 為レ 二．謂二 之正回偏 互一，乃是兌也．然則畳 為レ 三者，六卦 為レ 三．此義一．亦 為レ 巽 為レ 兌，合而離・巽・兌三．此義二．兌既 在二 巽之 下一，則兌下巽上乃 成二 中 孚一䷼ ．是畳而 為二 三 爻一．便又 為二 巽・兌・中孚之三 卦一 也．此義三．故云畳而 為レ 三．変尽 成レ 五者，所謂畳而 為レ 三時，巽即下麗，兌即上麗．巽卻 在二 兌之下一．是巽下兌上乃 成二 大 過一䷛ 也．成二 大 過一 時，離初六・九二[35]変化而 為二 九五上 六一．成二 中 孚一 時，離九三・九四，変而 為二 六三六 四一．故曰，変尽 成レ 五[36]

重離の六爻の偏正の回互は畳んで三となり，変じ尽くして五となる．[…]　偏正の回互は畳んで三となるというのは [重離] の二を初に重ねる．四を三に重ねる．上を五に重ねる [．]　六爻はそうすると三爻となる．[…]　その時に，六五 [第五爻の陰線] の正は，変じて一 [陽線] となる．初九 [第一爻の陽線] の偏は，変じて二 [陰線] となる．これは「正回 ䷸ 偏互」と言う．つまりこれは巽である．[…]　次に，五を上に重ねる．三を四に重ねる．初を二に重ねる．[…]　その時に，六二 [第二爻の陰線] の正は，変じて一 [陽線] となる．上九 [第六爻の陽線] の偏は，変じて二 [陰線] となる．これを「正回偏互」と言う．つまりこれは兌である．そうならば，「畳んで三となる」とは，六卦が三となることである．これは第一の義である．亦，巽であり，兌であり，合せれば離と巽と兌の三である．これは第二の義である．兌は既に巽の下にあるので，そこで兌下・巽上は，つまり中孚 ䷼ となる．これは「畳んで三爻」となる．そうすると又，巽と兌と中孚との三卦となることである．これは第三の義である．故に「畳んで三となる」という．「変じ尽して五となる」とは，所謂，畳んで三となる時に，巽はつまり下に付くものであり，兌は上に付くものである．巽は卻って兌の下にある．これは巽下・兌上であり，そこで大過 ䷛ である．大過となる時に，離の初六と九二[37]は変じて九五上六となる．中孚となる時に，離の九三と九四は変じて六三六四となる．だから，「変じ尽くして五と成る」と．

要するに，『重離畳変訣』における重離化成は「変」，つまり陰線と陽線の変換を柱とするのである．その「変」については，謙宗が巽の場合を挙げて，次のように説明する．

又巽順之義，君 視レ 臣之象也．恁時，六五之正，変而 為レ 一，初九之偏，変而 為レ 二．再三云，不二 是 言二 五之正中 変一，只五之正中⚋ 変 為レ 一也．初九之偏亦爾．不二 是 言二 始之偏位 変一，只初之偏位之一変 為レ ⚋ 也[38]．

また巽の順の義は，君が臣を視るという象である．その時に，六五の正が変じて一となり，初九の偏は変じて二となる．再三言うが，これは五の正中の変と言わず，ただ，五の正中の⚋ が変じて一となるのである．初九の偏もまたそうである．これは始の

35 「初九六二．」か．
36 『重離畳変訣』(SSZS, 注解 5: 43ab)．
37 「初九と六二」か．
38 『重離畳変訣』(SSZS, 注解 5: 44b)．

偏位の変と言わない．ただ初の偏位の一が変じて‥となるのである．

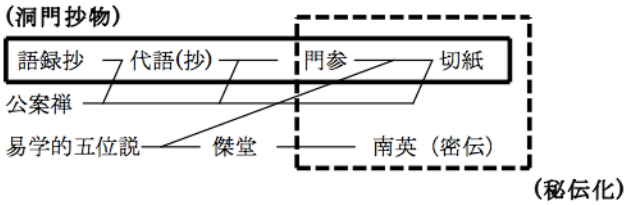
すなわち，重離の第六爻の位に居る陰線が陽線に変容しても，その位は「正中」という性格を失わない．また，重離の第一爻の位にある陽線が陰線に変容したとしても，その位で「偏」という性格が守られると言うのは，重離化成の「変」の道理である，と言っているのである．

つまり，『重離畳変訣』にみられる「密伝」は重離（またはその根拠である『宝鏡三昧』）と密接な関係があり，重離化成説における「変」を中心とするものであると言い得よう．さらに，その「変」の基本理解は，陰線と陽線の変換であり，その要点は『顕訣耕雲註種月擽摭藁』における「銭」の比喩に類似していることが指摘できる．しかし，その「変」と「銭」との関係性の理解は，更に進めて勘案できる．

「銭」の比喩を紹介するに際して，能勝は『顕訣耕雲註種月擽摭藁』に，その基本を「正が変じて一となり，偏が変じて二となるという意によって，◉無字は●，陽の一となり，⊕ 有字は陰の二となる．」としたが，波線がついた文章は，『重離畳変訣』での「変」を記述する「六二（第二爻の陰線）の正は変じて一となる．上九（第六爻の陽線）の偏は変じて二となる．」という言説と全く同じであり，残る「兌」・「中孚」・「大過」の「変」の場合も同様の傾向が指摘できる[39]．換言すれば，『顕訣耕雲註種月擽摭藁』の「銭」の比喩と，『重離畳変訣』における重離化成の「密伝」とに密接な関係があり，「密伝」というのは「銭」または「銭」という比喩によって象徴された「変」という概念そのものである，と考えられるのである．

結論

洞門抄物とは言い難い『重離畳変訣』に見られる「密伝」が五位説における「銭」であれば，『重離畳変訣』と『一文銭之切紙』とには密接な関係があり，同様に 15 世紀の峨山派の易学的な五位説，特に「銭」という比喩を反映したものであると言える．なお，峨山派の五位説が「秘伝化」という過程を経たことも確認できるのであり，謙宗の著作に見られる「密伝」と，臨済宗から明峰派への批判対象の変遷を考えれば，その「秘伝化」の理由は曹洞宗内の諸々の門閥，特に峨山派と明峰派の間に於ける派閥間での競合であったと位置づけることができる．切紙資料はより広い「秘伝化」の結果の一つに他ならず，謙宗の「密伝」も同様の過程をたどって形成されてきたものであると考えられる．その結論を上に載せた石川氏の図示に加えると，次のようになる．



[39] 『重離畳変訣』（SSZS, 注解 5: 44b–46a）参考．

このような図に整合性が見出されるならば，切紙の形成を単に公案禅・洞門抄物に帰することは適当ではない．むしろ，「公案禅」ではない易学，又は易占は切紙資料の形成における不可欠な要素であり，さらに，洞門抄物の枠組みでは捉えることのできない『顕訣耕雲註種月擽摭藁』・『重離畳変訣』・『偏正五位図説詰難』等のテキストを勘案することで，初めて切紙の内容と形成背景が明らかとなるのである．

〈略号および使用テキスト〉

SSZS　『曹洞宗全書』.
T　『大正新脩大蔵経』.
X　『卍新纂続蔵経』.
ZSSZS　『続曹洞宗全書』.
『一文銭之切紙』 石川 [2001: 383f].
『顕訣耕雲註種月擽摭藁』 SSZS, vol. 注解 5.
『五位旨訣』『撫州曹山元證禪師語録』T No. 1987a, p. 533bc.
『竺山得仙語録』 ZSSZS, vol. 語録 1.
『智證伝』 X No. 1235.
『重離畳変訣』 SSZS, vol. 注解 5.
『通幻霊禅師漫録』 T No. 2592.
『人天眼目抄』 中田・外山 [1975].
『偏正五位図説詰難』 SSZS, vol. 注解 5.
『宝鏡三昧』『州洞山悟本禪師語録』T No. 1986a, p. 515ab.
『宏智禅師広録』 T No. 2001.

（参考文献）

安藤嘉則　［2000］『中世禅宗文献の資料』，国書刊行会.
石川力山　［2001］『禅宗相伝資料の研究』上・下巻，法蔵館.
石附勝竜　［1978］「易学と宗乗」,『宗学研究』20，111–116.
小川隆　［2011］『語録の思想史』，岩波書店.
佐橋法龍　［1953］「日本に於ける五位説の変遷」,『印度學佛教學研究』1-2，402f.
［1954］「省灯首座の五位思想」,『印度學佛教學研究』3-1，139–141.
小早川浩大［2011］「『雲巌宝鏡三昧』の註釈について」,『印度學佛教學研究』60-1, 87–91.
坪井俊英　［1960］「日本浄土教における口傳法門の形成 — 特に法然門流について」,『印度學佛教學研究』8-2，633–636.
薗田稔，橋本政宣
［2004］『神道史大辞典』，吉川弘文館.
高田真治・後藤基巳
［1969］『易経』，岩波書店.
中田祝夫・外山映次 (編著)
［1975］『人天眼目抄』，勉誠社.

松田陽志　［1995］「『顕訣耕雲註種月擽摭藁』について」,『宗学研究』37，203–208.
［1996］「『顕訣耕雲註種月擽摭藁』における偏正五位説の諸問題（中）」,『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』29，91–106.
［1998］「『顕訣耕雲註種月擽摭藁』における偏正五位説の諸問題（四）」,『曹洞宗研究員研究紀要』29，173–197.
花野充昭　［1980］「日本中古天台文献の考察 (五) — 切紙相伝について」,『印度學佛教學研究』 28-2，751–753.
広瀬良文　［2012］「中世後期禅宗相伝書における銭貨 —『一文大光銭』を中心に」,『曹洞宗研究員研究紀要』42，71–91.
Bodiford, William
［1993］ *Sōtō Zen in Medieval Japan*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
Licha, Stephan
［2009］ "Words in Silence: Preliminary Remarks on the Use of Kōan in Late Medieval Sōtō Zen Buddhism, "『駒澤大学禅研究所年報』, 21, 305–340.
［2011］ *The Imperfectible Body: Esoteric Transmissions in Medieval Sōtō Zen Buddhism*, Ph.D. Dissertation, University of London.
Schlütter, Morten
［2008］ *How Zen Became Zen*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

〈Keywords〉　曹洞宗，易経，五位，切紙，秘伝

リチャ　ステファン　　東京大学大学院特別研究員

On the Origin of Kirigami in the Sōtō School: With Special Consideration of the Coin Metaphor in Five Positions Thought

Licha, Stephan

This paper offers a new interpretation of the origin of kirigami in the Sōtō school. The paper proposes that kirigami were the products of a process of esoterization in the context of intra- and intersectarian strife. The paper suggests that this process can be traced to speculation on the Yijing. The paper first considers the oldest existent kirigami document, the Ichimonzen no kirigami 一文銭之切紙. This text offers an interpretation of the symbolic meaning of a Chinese coin in terms of both the Yijing and the Five Positions (goi 五位). The same connection between the Yijing, the Five Positions and coins is apparent in the works of Ketsudō Nōshō 傑堂能勝 (1355–1427) and his disciple Nan'ei Kenshū 南英謙宗 (1387–1460). Nōshō used the coin in order to explain the transformations of the tri- and hexagrams associated with the Five Positions. However, Nōshō's work differs from the Ichimonzen no kirigami in that the metaphor of the coin is nowhere associated with secrecy and transmission. It was in Kenshū's later work that there appeared an association between the teaching of the Five Positions and a "secret transmission" (miden 密伝). Initially, Kenshū used this notion to criticize Rinzai masters' interpretations of the Five Positions but he eventually came to wield it as a weapon against rival factions of the Sōtō school. This development occured in the context increasing strive between Sōtō lineages in the 15th century. Kenshū never reveals the nature of this secret transmission. Yet a close reading of the Jūri jōhen ketsu 重離畳変訣 suggests that it is closely related to the teachings on coins inherited from Nōshō. Consequently, the metaphor of the coin appears to have undergone a process of esoterization in Kenshū. Tthis process coincides with the transmission of the Ichimonzen no kirigami. As both Nōshō and Kenshū as well as the author of the kirigami belonged to the Gasan 峨山 faction, the paper concludes that it was here that secret transmissions first formed and that one part came to be formalized as kirigami documents.